

多様な性格をもつ

「債券ファンド化」が課題に

貸出も含めたB/S全体の収益性向上を

みずほ証券 市場営業グループ
投資戦略部長 高田 創

九〇年代以降の「銀行経営勝利の方程式」はどのようなものであっただろうか。あえて単純化した議論をすれば、「貸出の度合いを下げる、株式をもたない、長期国債を保有する」ことだった。こうした経営を意図的に行った銀行は稀だろう。しかし、結果として地域金融機関はそうした形になりやすかった。

九〇年代以降 「債券ファンド化」

戦後の日本の金融システムは、大企業を中心にした旺盛な資金需要に対応し都市銀行・長期信用銀行等の専門金融システムがあり、その不足した資金を地域金融機関が中心になって集

め、さながら自動的に資金をつなぐ「運用導管」（安定的運用ルート）が存在していた。地域金融機関は預金が貸出を上回る「ローン行」、都市銀行は貸出が預金を上回る「マネー行」と区分された。地域金融機関は昔から「運用難」状況にあり、第1図にある

ように預貸率は低かった。同時に、大企業を中心とした持合い株式保有も低く、株式保有比率も低かった。預貸率の低さから、貸出以外の余った資金を継続的に運用する「余資運用」として、引受け国債、地方債および金融債等が存在し、比較的持ち切りで保有するスタンスにあった。

そもそも貸出比率の低さから九〇年代以降のデフレ状況においては経営面での健全化に働いた。その対極として、都市銀行は貸出比率が高く持合い株式を多くもったことから、九〇年代半ば以降の金融システム問題は、多分にメガバンク問題の相を呈していた。

資産の効率的運用のための 有価証券の役割

大和証券SMB C
債券調査部 投資戦略グループ

機動的・能動的なエクスポージャーのコントロールを

人 義 田 義
弘 信 倉 白
鉄 倉 倉

中小・地域金融機関においては本格的な金利上昇への備えとして、①中長期的には金利変化に対する耐久度が高い「資産と負債の再構築」が、②短期的には有価証券を利用した「ヘッジ」と「分散」といったコントロールが、現実的な対応となる。そして今後は、中小・地域金融機関に求められるALM上のキーワードは「資産ポートフォリオの整備とそ

機動的 資産アロケーションを

景気回復の期待感が高まり、本格的な金利上昇の兆しが出てきた。長期に及びデフレ、低金利という環境下での発想を大転換し、来るべき金利上昇というトレンドを想定しつつ、中小・地域金融機関はその使命を果たすためにも、「資産ポートフォリオの整備」を考える時期にきている。

中小・地域金融機関にとって、債権者は地域を中心とする預金者である。万が一健全性が損なわれることになった場合、信用基盤の収縮による地域経済への影響は計り知れない。「銀行の業務の健全かつ適切な運営

の確保」と、「中小企業への積極的な融資展開による地域経済の活性化」は、中小・地域金融機関の恒久的な命題である。

金融機関が健全性を確保し、

収益を獲得するためにコントロールすべき大きなリスクの一つが金利リスクである。金利リスクはバランスシート項目のほとんどに内包されており、「負債の年限が短く、資産の年限が長い」というミスマッチが恒常的に生じている銀行にとつては、

金融環境に応じて機動的に資産アロケーションを行い、最適化をはからなくてはならない。とくに金利上昇期には、短期的に資産サイドの減価幅が負債サイドよりも大きくなり、財務に巨大なマイナスのインパクトを与

える可能性がある。まさに今後「金利上昇への対応の巧拙」が金融機関の健全性を大きく左右し、勝ち残っていくための条件といえよう。

有価証券と貸出の 相互補完

中小・地域金融機関にとつて「預金」と「貸出」は、長期間にわたるコミットメントによって培ってきた顧客との信頼関係そのものである。したがってこのエクスポージャーを機動的に変化させることには限界があり、環境の変化に応じて迅速に対応することはきわめてむずかしい。しかも規模や地域、業種のリスクが集中している。これは資産アロケーションにおける